

# 國學院大學學術情報リポジトリ

## 断章-エステラジーの謎 後篇 1897年-1923年

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 横山, 謙一 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/00001651">https://doi.org/10.57529/00001651</a>

## 断章——エステラジの謎 後篇 1897年-1923年

横山謙一

## はじめに——前段階：「プティ・ブルー」発見まで——

エステラジが最初にドイツ大使館駐在武官フォン・シュヴァルツコッペン VON SCHWARZKOPPEN 大佐のもとをフランス軍の機密情報売るために訪れたのは、シュヴァルツコッペンの『手帖』によるなら、1894年7月20日の午後3時か4時のことであった。当時ドイツ領であったアルザス・ロレーヌ地方を旅行する目的でパスポートを入手するためとの口実での訪問であった。やにわに金銭を無心したという。駐在武官は突然の申し出に驚き訝って、最初の日にはこれを断った<sup>(1)</sup>。翌日エステラジは手紙でロシアに関する重要な情報を送ってきた。ベルリンの情報部に概要を送ったところ、交渉を続けるようにとの命令を受け取る。同月27日に再訪してきて重要な機密情報を提供する代わりに毎月2,000フランを要求してきたが、この時もシュヴァルツコッペンはエステラジを思いとどまるよう説得した。しかし本国からの命令もあり、シュヴァルツコッペンは8月13日のエステラジ再訪の際に情報提供を受け取ること合意し、最初は1,000フランをエステラジに支払った<sup>(2)</sup>。

9月1日にはエステラジ自身が書いた掩護部隊のリストと、120ミリ砲の説明書と、野戦砲兵射撃教範を持参してくる。いわゆる「ボルドロー（明細書）Bordereau」に列挙された5項目のうちの3つ情報であった。エステラジが野戦演習に出かける前の9月1日まで届くはずであった「ボルドロー」は、シュヴァルツコッペンの手には入らなかった。おそらくフランス情報部の第三者が持ち去ったのであろうと彼は推測している<sup>(3)</sup>。

10月29日に反ユダヤ主義の「リーブル・パロール Libre Parole」紙にドレーフスが逮捕されたと報道された後も、エステラジは臆することなくドイツ大使館のフォン・シュヴァルツコッペン駐在武官のもとに通い続

ける。シュヴァルツコッペンがエステラジーにドレーフュスの逮捕を知っているかと尋ねたが、知らないと答え、彼は郵便ではなく直接大使館に情報を持ってくるので不安がなく、かえてベルリンへの情報を送る際には用心するようたしなめられる始末であった<sup>(4)</sup>。

1896年3月頃に当時の情報部長ピカールPICQUART中佐が前任のサンデルSANDHERR大佐から引き継いだ書類の中から発見した一通の「プティ・ブルー petit bleu (封緘青色電報)」に記されていた事柄から、ドレーフュス事件の真犯人がドレーフュス大尉ではなくエステラジーであることを発見した<sup>(5)</sup>。その後ピカール情報部長は情報局付警察保安局 Sûreté générale 出向のデヴェルニヌ DESVERNINE 警視にエステラジーの尾行と書簡の検閲を依頼する。さらには友人のモーリス・ヴェール Maurice WEIL についても監視させる<sup>(6)</sup>。ピカールのこうした「真犯人捜し」に参謀本部首脳はなぜか神経をいらだたせた。ピカールのチュニジア配属でこの監視行動は中断されるが、エステラジーがドイツ大使館に通っていたことなどを確認して、ピカールはこの追尾を成功だと確信している。

## 第1章「ル・マタン」紙への「ボルドロー」の公表とカステラン議員の対政府質問

エステラジーは1896年11月10日の「ル・マタン」紙に「ボルドロー」のファクシミリが発表されたのを見て驚いた。驚いたのはエステラジーだけではなく。彼が「ボルドロー」に列挙したフランス陸軍の機密情報を受け取ったシュヴァルツコッペンも同様であった。前述の「シュヴァルツコッペンの手帖」にこの出来事への反応が自身の手で記されているので、以下に引用する。

「ドレーフュス事件のその後の成り行きにとって重大な出来事が起きた。それは『ル・マタン』紙（1896年11月10日）にボルドローのファクシミリが公表されたことである。筆跡鑑定専門家のテソニエール TEYSSONIÈRES がボルドローの写真版を人に渡したからであった。テソニ

エールは陸軍省からドレーフスを有罪にした軍事法廷に喚問された筆跡鑑定家のひとりであった。この公表はフランス全体に極めて大きな震撼を呼び起こした。しかし最も動揺したのは私とエステラジーであった。なぜならこの時初めてドレーフスとエステラジーが取り違えられたことが、その結果無実のドレーフスがエステラジーのかわりに有罪にされたことが、この時点で明らかになったからである。エステラジーはというと彼の筆跡が公表されるや、自分が破滅に追いつめられたことをさとしたのである。ファクシミリにエステラジーの筆跡を確認するとさまざま、私の友人であるパニツアルディに初めて私に通牒した者の名前と肩書きを知らせた。<sup>(7)</sup>」

そしてシュヴァルツコッペンが許されるものならばこの恐るべき過ちを公表し、無罪の囚人を解放してあげたかったのだが、事態はこれに彼が関わることを許さず、外交的配慮もそうさせてくれなかったと自己弁護している。シュヴァルツコッペンにはエステラジーにはない良心の呵責が生じたのだ。

陸相のビヨBILLOTは「ボルドロー」を「ル・マタン」紙に渡したのは情報局部長のピカール中佐だと疑い、テソニエールが出所だと分かると、ピカールと敵対していたアンリをはじめとする情報部は落胆する。それでもエステラジーを真犯人だと確信して譲らないピカールにたいし、アンリをはじめとする情報部全体の警戒の包囲網が張りわたされる。ヴェールとエステラジーを庇護している陸軍最高幹部でパリ陸軍総司令官 gouverneur-militaire de Parisのソーシエ將軍（戦時の筆頭將軍・最高司令官 généralissime）に累が及ぶことを恐れ、そして無実のドレーフス大尉を終身流刑にした当時の陸軍大臣メルシエと参謀本部全体の責任が問われることを危惧したのであろうか。

レンヌ再審軍事法廷でのビヨ元陸軍大臣の証言によれば、ボワデッフル参謀総長がエステラジーを真犯人だと確信していたピカールを厄介払いのために遠地に追いやることを陸相に求めてきた。ピカールを高く評価して

いた陸相は最初の時点で抵抗したが、ついには受け入れ、東部国境とイタリア国境の情報網の整備のための視察と調査であるとの名目で、ピカールを送り出し、ついにはチュニジアを彼の任地として指定した<sup>(8)</sup>。

遠地に追いやられたピカールはチュニジアで秘密を抱えて死ぬことを恐れ、友人のルブロア LEBLOIS 弁護士に秘密文書を預けた。ルブロアはパリ7区助役を務めていた縁でパリ7区区長のシャルル・リレル Charles RISLER と知己の仲であり、元老院副議長シューレル-ケストネル SCHEURER-KESTNER はリレルの叔父であった。ルブロアはピカールの同意を得ることなく知り得た秘密をシューレル-ケストネルに打ち明け、副議長はドレーフュスの無実を証明するために行動を起こす。元老院副議長であったシューレル-ケストネルは、親友であったビヨ陸軍大臣や共和国大統領のフェリックス・フォール Félix FAURE にドレーフュスの無実を直接訴えようとする。しかし、最初にシューレル-ケストネルと会見した陸軍大臣は引き延ばしをはかり、その間にマスコミを通じての反撃を準備するのであった。

1896年11月12日にはカステラン議員が代議院でヴェールとエステラジーがドレーフュス事件に関係していると政府への糾問をおこなう予定であるとの匿名の手紙をモーリス・ヴェール受けは取り、彼から人を介して陸軍大臣のビヨ将軍にも伝わった。勿論この手紙を知ったエステラジーはまたもパニックに陥る。しかしカステラン代議士の11月18日の政府質問はドレーフュスの家族とベルナル・ラザール BERNARD LAZARE<sup>(10)</sup> の再審請求運動を糾弾する内容であって、ヴェールには少しばかり言及したが、エステラジーへの言及はなかった。カステラン自身はこの時点でエステラジーについてまったく情報を持っていなかった。ひとまず陸軍参謀本部は胸をなで下ろした。

エステラジーを保護することにまで参謀本部が危険を冒して踏み込んだ理由を探ることはむづかしい。エステラジーは金銭に困窮した放蕩者で、また家庭は破綻して妻と離婚の手続きにはいっており、愛人は多額の金銭

を貢がせたドゥ・ブランシー夫人Madame de BOULANCYばかりではなかった。もう一人の愛人マルグリット・ペイ Marguerite PAYSには二人で暮らすため別宅を彼の名前で借りていた。おそらくエステラジー自身を保護することは参謀本部にはまったくメリットはなかった。当時のメルシエ陸軍大臣や、ヴェイルを通じてエステラジーと知り合いであったソーシエ将軍をかばうためであったという理由だけで説明できるであろうか。そこでモーリス・パレオログ Maurice PALÉOLOGUEの「ドレーフェス事件日記 1894年-1899年 *Journal de l’Affaire Dreyfus 1894-1899*」で第三の犯人とされた陸軍の高官 « X » の存在がこの日記公表以来議論されてきた。この人物が隠蔽を働いたか、この人物をかばうためにそれがなされたと言うのである。

「ボルドロー」が「ル・マタン」紙に公表されカステラン議員の対政府質問を予告する匿名の手紙がヴェールの元に届く前に、身に危険が差し迫っているとまったく予感していなかったエステラジーは、パリからかなりの時間を要したルーアン勤務に不便を感じていた。パリには愛人のペイ夫人にアパートマンを借りて住まわせていたし、パリでは富を得るために関係を結んだエジプト系金融業者や金策をはたらきかける銀行・資産家たちからもルーアンは遠かった。また彼が関係の深かった「リーブル・パロール」などの国粹主義・反ユダヤ主義系新聞と遠ざかっているのも不自由に思った。そこで1896年8月ごろから有力な議員や陸軍高官のつてをさがして、パリの陸軍省勤務を、とりわけ情報部へ配属されるように働きかけた。特にヴェールを頼りにした。彼はソーシエ将軍のつてを持っていたからである。しかしパリへの配属の試みはことごとく失敗する。

当時の陸軍大臣ピヨは、ピカール情報部長の命を受けたデヴェルニヌ警視からエステラジーについての悪い評判を知らされていた。「羊小屋に狼を」入れる訳にはいかないとピヨはエステラジーの懇願をしりぞけた。<sup>(11)</sup>すると彼は右翼紙の紙面を通じてピヨ陸相を攻撃する。こうしたエステラジーの攻撃性はいたるところで本領を発揮する。

1897年はシューレル-ケストネルの年となる。ルブロア弁護士は甥のパリ第7区区長のリールから叔父のシューレル-ケストネルがドレーフュスの有罪を疑っていて、ドレーフュスが無罪であると確証を与える情報を捜しもとめていると聞いた。ルブロア弁護士はこの年の7月13日に直接シューレル-ケストネルの自宅を訪れ、秘密を保持してくれることを条件に、「プチ・ブルー」をのぞくドレーフュス無罪とエステラジーが真犯人であることを証明する証拠書類を提示する。ルブロア弁護士はシューレル-ケストネルに秘密を守ることを誓わせた。しかし政界には元老院副議長がドレーフュスの無罪を証明する証拠を手にしたらしいと言う噂が早々と広がった。彼がドレーフュスを政府高官に説得する行動は親友の陸軍大臣ビヨを皮切りに始められたが、すでに述べたとおり引き延ばしにあって、その間に反撃が準備され失敗する<sup>(12)</sup>。

## 第2章 「エスペランス」の手紙とモンスーリ公園での邂逅

一方エステラジーは「エスペランス Espérance (希望)」の手紙が届くまで、身に危険が差し迫っているなどとは気付かなかった。アンリはシュヴァルツコッペンがイタリア大使館付駐在武官パニツァルディに宛てて送ったとするドレーフュスがドイツのスパイであったと見せかける「アンリ偽書」を偽造し、あまつさえイニシャルがPのスパイについて知らせる文書をPの箇所をDと書き換えドレーフュス逮捕以前の日付にした偽造文書を作成して守りを固めた。そして参謀本部次長ゴンスはデュ・パティにエステラジーに身の危険が知らせる「エスペランス」の手紙を送らせた<sup>(13)</sup>。エステラジーが受け取ったこの「エスペランス」の手紙には「貴方の名前が一大スキャンダルの標的にされるでしょう。ドレーフュスの家族はドレーフュス裁判の根拠に使われていたこの(ボルドローの)筆跡の書き手としておやおやけに糾弾するでしょう<sup>(14)</sup>」と書かれていた。手紙を受け取ったエステラジーは狂乱状態となり、自殺を考えていると愛人のペイに打ち明け、アパルトマンの賃貸契約書の名義をペイに書き換えた。しかしシュヴァルツコッ

ペンをピストルで脅した10月22日夕刻に、変装した情報局のグリブランがエステラジー宅を訪れモンスリー公園での待ち合わせを伝えてきた。

「エスペランス」の手紙を受け取った直後にはエステラジーは半狂乱の体になり、こともあろうか「ボルドロー」が「ル・マタン」紙に発表されて以来関係を絶たれていたシュヴァルツコッペンのもとに1787年10月22日昼にエステラジーが現れて、ピストルで脅した。<sup>(15)</sup>モンスリーの待ち合わせで参謀本部の庇護を確信すると、夕方に再度現れた時には落ち着いた様子で、参謀本部の2人が彼をまもると約束してくれたと告げた。<sup>(16)</sup>これ以降参謀本部は陰に陽になって彼が逃亡しないように——逃亡すれば罪を認めたことになるので——庇護の手をさしのべる。モン・スリー公園にヴェールを被った謎の女装の人物（デュ・パティだったといわれているが、謎の女装の人物はあくまでエステラジーの作り話である）が現れて、政府高官らを脅迫するのに使う「救いの証拠」を渡したという。<sup>(17)</sup>その証拠の文書を手に入れて息を吹き返したエステラジーは大統領と陸軍参謀総長、陸軍大臣などの陸軍の高官に書簡を送る。ソーシエ将軍にもあなたは「陰謀事件」についてのすべての証拠を保持しており法廷で開示されるべきであるとして、暗に将軍を脅している。<sup>(18)</sup>その他の書簡にもいく度かソーシエ将軍の名前が挙げられているが、おそらくはエステラジー自身との結びつきを暗に匂わせているのであろう。

フェリックス・フォール大統領には3通の書簡を送っている。1897年10月29日付の最初の書簡には次のように記されている。

「共和国大統領殿、

1897年10月20日付で私に送りつけられた匿名の手紙を閣下に送らせていただきます。

私はこの手紙の中で予め狙いを定められた生贄として名指しされている人物です。私は私の名前が公表されて上官たちの態度がいかなるものかを待っているわけにはいきません。それゆえ私の上官であり、当然の保護者であります陸軍大臣に私の名前が公表された時に私を召喚するか

否かを尋ねるために手紙を書きました。

大臣はお答えになりませんでした。ところで私の家族はフランスの歴史の年譜とヨーロッパの高邁な使命の歴史においてかなり高名であり、それゆえ我が国の政府は私の名前に泥を塗られるままにされないよう配慮を払うであります。

それゆえ陸軍の最高責任者であります共和国大統領に訴えたいのであります。私は閣下にこのスキャンダルをやめさせていただきたいと願うのでありまして、閣下はそれがおできになるのであり、またその責務がございます。私は閣下にこの陰謀が仕掛けた名誉毀損にたいする裁判を要求いたします。この陰謀によってこの罨を仕掛けた犯人に彼の所属機関の秘密を提供し、あまつさえ私をこの哀れむべき人物にすり替えようとしています。

もし私が我が国の司法権の最高執行責任者によって苦悩が聞き入れてもらえないと言うことがありましたならば、私の訴願が家門の主に、すなわちエステラジー家の宗主でありますドイツ皇帝に届きますことをご存じいただきたいと申し上げておきます。皇帝は戦士であり、政治のさもなく汚らわしいはかりごとを尻目に戦士の名誉をたとえ敵軍であろうともお守りなさります。皇帝は10世代にわたる戦士の名誉を守るべく、万難を排して高らかに明言するであります。<sup>(19)</sup>」

10月31日付の第2の書簡では重大な秘密の文書を公表すると大統領を脅した。

「私は国家元首も、軍の最高責任者も援助や勇気付けや慰めの一言も栄誉が脅かされている上級将校にないのを知って残念であります。議会政治に配慮して政府が私の嫌疑を晴らしドレーフスの擁護者のために相変わらず口を閉ざして、はっきりとした明確な宣言をおこなわせないので私は知っております。

150年の間私の名を持ち血がつながる5人の将軍が、そのうちひとりはいつい最近敵前で戦死してフランスに忠誠を尽くしたのに、かくなる策謀

を用いてあわれな人物を救うための卑劣な行為で代価を支払われることを私はのぞみません。私は手にしうるあらゆる手段を行使するまでに追い込まれております。

しかるに心優しい女性が、ドレーフュスの仲間が、ピカール大佐の助力を得て私に対し企まれた恐ろしい陰謀を私に警告し、そして重要な書類の中から一通の証拠書類の写真をこの将校から手に入れてくれました。この証拠書類はピカール大佐が外国の大使館から盗んだもので、何人かの外交関係者の身に危険を及ぼすものであります。もし私が支援も正義の裁きも受けなかったならば、私の名前が公表されたならば、外国の側にあるべきこの写真を即座に公表します。(以下略) エステラジー<sup>(20)</sup>」

そしてついには11月5日付の3通目の大統領への手紙では、「私に対してたくらまれた恐ろしい陰謀を私に知らせてくれた女性は、私にとって際だった救いの証拠書類を私に渡してくれました。救いとなる証拠書類はドレーフュスの愚行を証明するもので、その手書き書類のファクシミリを公表すればフランスをこの証拠書類の公表によってフランスが自らを辱めるか、戦争をすることを余儀なせる我が国にとって危険なしるものであるからです」とさえ脅している。しかし自分に保護が与えられれば、この証拠書類は陸軍省に返却するといって大統領に取引きを迫った。

### 第3章 エステラジー裁判

ここからエステラジー裁判にいたる経緯について語ろう。アルフレッド・ドレーフュスの兄マチュー MATHIEU はシューレル-ケストネルからではなく、別のルートからエステラジーが筆跡を入手した。かつてエステラジーを顧客としていた銀行家のドゥ・カストロ DE CASTRO は「マタン」紙に発表された「ボルドロー」の筆跡とエステラジーのそれが同一であることマチューに教え、マチューは筆跡を確認する。あまりに酷似していた。間違いなく「ボルドロー」の筆跡はエステラジーのそれと同一であった。マチューはシューレル-ケストネルを訪れて、ボルドローの筆跡が分かったと告

げた。マチウが知った「ボルドロー」の名前はシューレル-ケストネルの知っていた名前と同一であった。シューレル-ケストネルは「貴方が自身で知った以上は、すぐさまそのことを陸軍大臣に知らせるのが責務でしょう」とマチウにすすめた。

1897年11月16日に、マチウ・ドレーフェスは陸軍大臣にエステラジー少佐をボルドローの本当の筆者であると告発した。11月28日付の「フィガロ」紙にはドゥ・ブランシー夫人に宛てた手紙が公表された。その文中には「私はこの国民（フランス国民——筆者注）が彼らを殺す弾薬にも値しないと真底から確信している…」と述べた祖国への裏切りの文として有名になる「ユーランUhlán（槍騎兵）」の手紙が含まれていた。この書簡を見てドゥ・ペリユー DE PELLIEUX 将軍はエステラジーの免訴を取りやめたといわれ、12月2日にはソーシエ将軍はエステラジーに対する予審の開始を命令し、同時に予審判事にはバリ第一軍事法廷主席検察官 commissaire rapporteur のラヴァリ RAVARY 少佐が任命された。一方、エステラジー裁判の成り行きであるが、陸軍高官達が彼を庇護する手を数多く打っても彼の不信心は拭えず、筆跡鑑定人の鑑定結果に強く抗議したために、参謀本部側は裁判の非公開 à huis clos を約束し、あまつさえテズナ TÉZENAS という弁護士を彼に紹介し費用も支払う。なぜこうまで陸軍参謀本部がエステラジーを庇護し、ドレーフェス事件の再審を拒み、身内のピカール情報部部長まで迫害したのかは、この事件の最大の核心であり、謎であり、多くの論争を生んでいる。

翌年の1898年1月10日にエステラジー裁判は開廷され、翌日結審してエステラジーは無罪放免される。公判記録は公判の大部分が非公開であったため存在しない。エステラジー裁判は特別裁判の軍事法廷で行われることが決定され、マチウ・ドレーフェスの弁護人であるドマンジュ DEMANGE とラボリ LABORI は退廷させられた。1897年 11月16日のマチュー・ドレーフェスの陸軍大臣に宛てた告発状 La dénonciation adressée par M.Mathieu Dreyfus au Ministre de la Guerre<sup>(22)</sup> はマチューが提出した告発状で、当然公

表されているが、これに加えて11月20日と12月3日のドウ・ペリユー將軍の2つの証拠調べ調書 *enquêtes* の報告書 *rapports*<sup>(23)</sup> と1897年12月31日付の予審判事ラヴァリー少佐の報告書 *rapport*<sup>(24)</sup>、1898年1月2日付パリ管轄区司令官ソーシエ將軍の裁判命令 *ordre de mise en jugement*<sup>(25)</sup>、1898年1月10日のエステラジーへの尋問記録 *interrogatoire*<sup>(26)</sup>、1898年1月11日の判決文 *jugement-d'acquittement*<sup>(27)</sup> は公表されている。11月20日のドウ・ペリユー將軍の証拠調べ調書 *enquête* に書かれた証拠調べは、11月17日にドウ・ペリユー將軍の私宅で行われた。その遣り取りはマチュー・ドレーフュスの回想『事件』に詳しく記されている<sup>(28)</sup>。

以上の断片的証拠以上に我々の興味を引くのはアンリ情報部長が自白して「自殺」した後ロンドンに逃亡したエステラジーが、1900年2月-3月にフランス総領事アンドレ・ルケー André LEQUEX の尋問に対しての証言<sup>(29)</sup> である。この証言で大統領に手紙を書いたのはフランス陸軍参謀本部のもとに従ったからである、また「明細書(ボルドロー)」はすでに亡くなったサンデル大佐の求めに応じてドイツ諜報機関を欺き、より重要な文書を手に入れるために書いたなど、彼に対する嫌疑への言い訳を陳述している。しかしサンデル大佐とエステラジーの関係を証明する文書をエステラジーは一切提示することが出来なかつた<sup>(30)</sup>。

エステラジー裁判は、前述のマチュー・ドレーフュスの回想『事件』に述べられているように、一方的にエステラジーに肩入れして、彼の無罪放免を予定して審判が進められた。『事件』から公判のこうした経緯をしめす証言を引用しよう。

「エステラジーには、ほんの形ばかり尋問がなされただけだった。ドウ・ペリユー將軍による予審 *instruction* での証拠調べ、ラヴァリー少佐による予審でのそれと同様に、エステラジーにやがておこる危険を知らせた匿名の手紙とか、プロ大尉の話、《救いの文書 *document libérateur*》<sup>(31)</sup> のこと、ヴェールの女とその秘密めいた待ち合わせ *rendez-vous* のことなど、すべての事柄が大まじめに、さも重大なことであるかのように受けとめ

られ、意義も批判もさしはさまれることはなかったのである。(…中略…)

翌日、九時に法廷は再び開かれた。傍聴禁止命令が出された。

戦術は巧妙で悪質だった。(略)

また、極めて重大なことに、私たちが把握した事実のうちから1898年の筆跡鑑定と1894年のそれとのあいだの矛盾する部分をまるでこっそり抜き取るかのように、その1894年の有罪判決を台無しにさせる新事実を破毀院で使えないようにさせるという妨害が、私たちに対してなされたのである。まさに窒息させるようなやり方だった。<sup>(32)</sup>」

このちエストラジーは一事不再理で身の安全は確保されたかに見えた。

#### 第4章 偽電報事件と破毀院刑事部予審での証言

エストラジーは既に予定されていたかのように1898年1月10日-11日の軍事法廷で無罪放免の判決を下されたのであるが、数か月後のアンリ情報部長の自白と「自殺」の後に、彼はロンドンに逃亡した。それに先立つ7月に彼に33,000フランの金銭をだまし取られた甥のクリスチャン・エストラジー Christian ESTERHAZYは1898年7月9日に被害を予審判事ベルチュリュス BERTULUSに訴え、彼が知り得ていたエストラジーと参謀本部との共謀やピカールの信用を失わせるための偽の電報<sup>(33)</sup>を送ったことを彼に暴露した。クリスチャン自身が偽電文事件に関わっていたのであった。

叔父のヴァルサン-エストラジーは7月12日に偽電報の件で逮捕されたが、この時はカヴェニャック陸軍大臣の司法当局への圧力でベルチュリュスの予審<sup>(34)</sup>は無効とされ、<sup>(35)</sup>8月12日に釈放された。しかし1898年6月にプリソン内閣が組閣されると、その陸軍大臣に任命されたカヴェニャックはドレーフスを裁く前に、軍規に背く墮落した軍人を肅正することを決意し、エストラジーを免役除隊処分にした。彼はデュ・パティをも巻き添えにして彼が自分を保護してきた「事実」を暴露し、デュ・パティも退役処分を受け<sup>(36)</sup>る。この時にはもはや参謀本部はエストラジーの保護者ではなく敵対する

側に移っていたし、エステラジーも自分を除隊処分にした参謀本部と陸軍大臣に復讐しようと思うようになった。

彼が最も頼りにするアンリ情報部長が「自殺」し、自身も退役処分に処せられると、彼にとっての2つの破局を目前にして以前から念頭に置いていた海外逃亡を実行に移した。その前に彼は自殺を考えたというが、「オブザーバー Observer」紙などのパリ特派員であるロウランド・ストロング Rawland STRONGにロンドンで記事を書いて生計をたてることを提案され、思い直してベルギーを経由してロンドンに逃亡する<sup>(37)</sup>。

その後1899年に「交通許可証 sauf-conduit」で自分の身の安全を手にして破毀院で証言するために短期間パリに戻る以外<sup>(38)</sup>は、再びフランスに帰国することはなかった。国外の報道機関を通じて世界に訴えることによって参謀本部と陸軍大臣に一矢報いることも念頭にあり、また国外の報道機関は彼の情報を高く買ってくれることも期待に入れていた。そして自分の自白を飾り立てる。自分はサンデル情報部部長の諜報員であって、シュヴァールツコッペンに偽の情報を手に入れさせ、より重要な情報を手に入れようとしたのだと言いつた<sup>(39)</sup>。ドレーフェス再審を受理するか否かを決める破毀院の刑事院予審証人尋問で証人として証言するために、エステラジーはなぜ身の危険を冒してフランスに一時帰国したのか。彼の予審証人尋問での証言から、彼の真意を推察したい。

エステラジーはパリ到着前の1899年1月13日に破毀院刑事部予審の裁判長に手紙を書いて、同月17日に証言することを求められていたが出頭できなかったのは、自分を取り調べるベルチュリュスに身柄の安全の保証を拒否されたからだと言いつし、故サンデル情報部部長の命で相手からより高度の情報を受け取るために、ドイツに機密情報を提供した。また陸軍参謀本部は彼の保護者となった。しかし7月1日にカヴェイニャック陸軍大臣が彼を退役処分してから敵対的関係にかわったとその書簡で説明する<sup>(40)</sup>。身柄の保証を得てエステラジーは同月23日に証言を行う。彼は重ねてドイツに機密情報を提供したのはサンデル情報部部長の差し金であったとのべた後

で、陸軍参謀本部の保護と共謀関係を詳しく証言した<sup>(41)</sup>。ロンドンに逃亡してからもエステラジーが自己正当化に懸命となったのは、生涯汚名を着ることを怖れた——身から出た錆であったが——こともあるが、身内の右翼・反ユダヤ主義ジャーナリズムから見放されることを怖れたという理由がむしろ大きかったのである。

破毀院が1894年のドレーフュス裁判判決を破棄した結果、1899年8月7日に始まったレンヌ裁判にはエステラジーは証人に喚問されたにもかかわらず出廷しなかった。ドレーフュスを無罪にする裁判を目撃したくないうえに、加えて旅費がないという理由で欠席した。何を言い出すか分からないエステラジーの欠席に陸軍首脳部は安堵した。かわりに長文の手紙をカリエール CARRIÈRE 陸軍理事（普通裁判所の検察官にあたる）に送ってきた。この手紙でもまた「サンデルの求めに応じて私はシュヴァルツコッペン氏と関係を持った。そして1894年7月に私はこれを繰り返した

J'entrai donc, à la demande du colonel Sandherr, en relations avec M. de Schwartzkoppen, et ceci je le répète, en juillet 1894」<sup>(42)</sup>と書き送ってきた<sup>(43)</sup>。

## 第5章 ロンドンでの逃亡生活——後日談

ロンドンでは友人も金もなく英語も片言しかできなかった。自分はドレーフュスを無罪にするために、ユダヤ陣営からたくさんのお金をもらって身代わりとなったとフランスの右翼系新聞で主張した。「オブザーヴァー」紙に作りあげた秘密情報を報道させたが、報酬を受け取ることが出来なかった。後で報酬の支払いをもとめて訴訟を起こしたが、わずかな金額しか手にすることが出来ず、生活は困窮したままであった。

手を尽くしてフェイヤール出版社 éditions Fayard と事件の内情暴露の書「エステラジーによるドレーフュス事件の内情 *Les Dessous de l'affaire Dreyfus par Esterazy*」の出版契約にこぎ着ける。しかしこの内情暴露の書においても彼はいまだ事件の「真相」を明かさない。売文業として生計を立

てることに関わったエステラジーは、小出しに、出来るだけ時間を長引かせて「真相」を世間に公開しようとする。このロンドンの地で記事を書いたり、インタビューを受けたり、矛盾に満ちた声明を出したりしてなりわいを立てる。レンヌ再審軍法会議に送られる彼の証言は、1900年2月-3月にフランス総領事アンドレ・ルクーの尋問に対しての証言<sup>(44)</sup>にあるようにサンデル情報部長との関係を認めている（すなわちサンデルに求められてシュヴァルツコッペンに攪乱するための情報を伝えたと主張している）が、「ボルドロー」については次をつぐんでいる。

ドレーフュス事件に付随する諸係争事件に対しすべて恩赦を与える恩赦法が政府によって提案され、1900年12月に可決されることが判明すると、彼のかつての保護者に対する脅し的手段も復讐のそれも失うことになり、兵糧も尽きそうになる<sup>(45)</sup>。そこでいくばくかの金銭を入手するために「アンデパンダンス・ベルジュ L'Indépendance belge (ベルギーの独立)」紙にフランス総領事アンドレ・ルクーへの証言は、参謀本部との共謀の下で行ったとし、これに加えて偽造メモ（短信）はアンリなどの手になると見せかける改竄を加えて、恩赦法発行の前にこの情報を売って収入を得た。元愛人を通じてドレーフュス側の中心人物であるレーナックにも、自分がサンデル情報部長とのさらには情報部との関係があるかのように偽った手紙の束を売った<sup>(46)</sup>。

### 終わりに——世紀のいかさま師エステラジーの最期

その後2年間あまり安宿を泊まり歩き餓えと寒さと病気に苦しみ、再び自殺を考える。ブリティッシュ・ミュージアムで暖を取って歴史と国際政治などを学び<sup>(47)</sup>、行商を行い、フランス語を教え、売春婦のひもとなったりした。困窮した生活に苦しんだすえに、1903年の叔父のボーヴァル BEA-UVVALが死去し、遺産としてエステラジーに年1,200フランの年金が遺産として手に入り、ようやく生活の保障を得た。

さらに旧知の「リーブル・パロール」紙に3年の間平均7本から8本の口

ロンドンの生活についての記事をシュリヴァン SULLIVAN という偽名で投稿する。しかし「アクション・フランセーズ Action Française」などの極右・国粋主義新聞は、ユダヤ側を買収された「身代わり l'homme de paille」だとして攻撃したので、「リーブル・パロール」紙もやむなく「シュリヴァン」と関係を絶つことになった。ロンドンでの日常生活では「フィッツジェラルド FITZGERALD」もしくは「ジャン・ドゥ・ヴォワールモン伯爵 comte JEAN DE VOILEMONT」と名乗って身元を隠した。

1904年の末頃、マリー・ルイズ MARIE-LOUISE という名の娼婦と出会う。彼女は父親のいない男子を産んで母親に預けてきた。エステラジーは彼女に一生に一度だけの他人への施しをして、母親と男児をロンドンに呼び寄せさせた。しかし不治のエーテル中毒の病に冒されていた彼女はエステラジーの元を去って南アメリカに旅立ち、戻ってこなかった。

ロンドンで転々と家を移した末に、ロンドンの北方32キロメートルにあるハートフォードシャー Hertfordshire のハーペンデン Harpenden という名の小村に「ジャン・ドゥ・ヴォワールモン伯爵」と名乗って身を落ち着かせたのは1908年末のことであったという。この住まいにはアルザス ALSACE、またはマリー・ルイズ（上記のマリールイズとは別人）という名のみで知られる女性と同居した。彼女の身元はドレーフェス事件の研究者マルセル・トマ Marcel THOMAS が調査に骨を折ったが不明のままである。

その後は第1次世界大戦中にドイツのスパイとして本国において欠席裁判で死刑判決を下されスイスに亡命したジュデ JUDET の新聞「レクレール L'Éclair」に、「知られざるイギリス」という連載記事を1911年から1913年まで「ウェーヴァリ WAVERLY」のペンネームで書いた。第1次世界大戦中は反連合国的立場から書かれた記事を書く彼の親ドイツ的立場は、片田舎のハーペデンの村でも人の口の端に上ったという。

1923年5月20日から21日にかけての夜にエステラジーはこの世を去った。詩人シェリーの「彼は我らが夜の闇よりも高く舞い上がった He has outsoared the shadow of our night」という詩文を墓石に刻んだ偽名「ヴォ

ワールモン伯爵」の墓には嘘の生年が記されていた。死後にまで嘘を通し続けた世紀のドラマを巻き起こした人物の締めくくりがそこにはあった。彼が生前にドレーフュス派のジャーナリストであるポール・デザシ Paul DESA-CHY に委託したエステラジー文書は、彼の死後に国立図書館手稿部門に寄贈された。<sup>(48)</sup> (了)

註

- (1) SCHWARZKOPPEN,Maxilimilien von : *Les Carnet de Schwarzkoppen*.édités par Bernhard Schwarzkoppen et traduits sur le texte allemand par A.Koyré. Paris. Les Éditions Rieder, 1930.pp.5-7
- (2) *Ibid.*,pp.10-14
- (3) *Ibid.*,pp.21-22
- (4) *Ibid*,pp.127-128
- (5) 「ブティ・ブルー」の発見とその後の推移については、拙稿「再燃するドレーフュス事件・初期ドレーフュス事件史の研究（Ⅲ）——「ドレーフュス派 Dreyfusards」の形成過程についての一考察——」国学院法学第36巻第4号、81-86頁で詳述した。
- (6) THOMAS, Marcel; *L’Affaire sans Dreyfus*. Paris.Fayard, 1960,pp.238,et 258,358-359
- (7) SCHWARZKOPPEN ; *Les Carnet de Schwarzkoppen.op.cit.*,pp.161-162
- (8) *Déposition du general Billot à Rennes (14 août 1899)*,dans LEBLOIS,Louis; *L’Affaire Dreyfus.L’Iniquité. la préparation. Les principaux faits et les principaux documents*. Paris. Lib.Quillet,1929,p.475
- (9) 2時間にも満たなかったカステランの対政府質問については以下の箇所を参照。  
*Journal officiel.Chambre des Députés.Séance du 18 novembre 1896*,pp.1610-1615
- (10) ベルナルル・ラザールの再審運動と彼の経歴については拙稿「再燃するドレーフュス事件・初期ドレーフュス事件史の研究（Ⅲ）——「ドレーフュス派 Dreyfusards」の形成過程についての一考察——」既掲論文、58-74頁を参照。
- (11) THOMAS, Marcel; *L’Affaire sans Dreyfus.op.cit.*,p.257
- (12) この「反撃」の過程については、拙稿「再燃するドレーフュス事件・初期ドレーフュス事件史の研究（Ⅲ）——「ドレーフュス派 Dreyfusards」の形成過程についての一考察——」既掲論文、90-94頁で詳述した。
- (13) THOMAS, Marcel; *L’Affaire sans Dreyfus.op.cit.*,pp.419-426

- (14) BREDIN, Jean-Denis; *L’Affaire*. Paris. Julliard 1983.p.182
- (15) 自分たちの関係を否定しなければ、シュヴァルツコッペンの前で自殺すると脅したという説もある。THOMAS, Marcel; *L’Affaire sans Dreyfus.op.cit.*,p.430
- (16) アンリとデュ・パティの2人である。 *Ibid.*,pp.424-428
- (17) DREYFUS, Mathieu; *L’Affaire telle que je l’ai vecue.op.cit.*,p.119、邦訳、マチュー・ドレーフス著、小宮正弘訳『マチュー・ドレーフスの回想。事件』、前掲書、159頁
- (18) MIQUEL, Pierre ; *Une énigme?L’Affaire Dreyfus*. coll. « Dossiers Clio ». Paris. PUF. 1972. p.46
- (19) *Les trois lettres d’Esterhazy au Président de la République.Première lettre du 29 octobre 1897* dans LEBLOIS; *L’Affaire Dreyfus*. op.cit., pp.579-580
- (20) *Seconde lettre du 29 octobre 1897*. dans *Ibid.*,p.580
- (21) *Troisième lettre du 5 novembre 1897*.dans *Ibid.*,p.581
- (22) cf.*Ibid.*, p.582
- (23) *Ibid.*,pp.587-594
- (24) *Ibid.*,pp.597-602
- (25) *Ibid.*,p.602
- (26) *Ibid.*,pp.576-579 エステラジー裁判ではドウ・ペリユー将軍はエステラジーに宛てられた、彼の父がクリミア戦争においてウーパトリアEupatoriaの戦いを指揮したことの詳細を尋ねるプロBRO大尉の手紙について注目している。プロが、ドレーフス大尉は「ボルドロー」をエステラジーの筆跡を模倣して偽造したという説にこだわったと言われていたからである。プロはエステラジーの筆跡を入手するためのこの手紙を出した覚えがないと否定した。エステラジーの作り話に陸軍参謀本部は振り回され続けるのである。
- (27) *Ibid.*,p.608
- (28) DREYFUS, Mathieu; *L’Affaire telle que je l’ai vecue.op.cit.*,p.100-102、邦訳、マチュー・ドレーフス著、小宮正弘訳『マチュー・ドレーフスの回想。事件』、前掲書、130-132頁
- (29) LEBLOIS, Louis; *L’Affaire Dreyfus. op. cit.*,pp.550-575
- (30) THOMAS, Marcel; *Esterhazy ou l’envers de l’affaire Dreyfus*. Paris. Vernal/Philippe Lebaud.1989,サンデルとの関係を証明する文書が存在しなかったことは、エステラジーの生涯について詳しいこの著書の特にpp.358-364を見よ。
- (31) 「あのD…の奴が (Ce canaille D…) 」と呼ばれていた文書であった。

- (32) DREYFUS, Mathieu; *L’Affaire telle que je l’ai vecue.op.cit.*,p.129-130、邦訳、マチュー・ドレーフス著、小宮正弘訳『マチュー・ドレーフスの回想。事件』、前掲書、177頁 筆者は小宮訳を一部改訳した。
- (33) 1897年11月10日に、パリからスースに駐在するピカールのもとに、「ブランシュ BLANCHE」と「スペランツァ SPERANZA」という匿名の人物から2通の偽電文が送られた。「ブランシュ」には「ブルーがジョルジュによって偽造された証拠は握られている」と書かれており、「スペランツァ」には「半神demi-dieuよ、やめなさい。すべては発覚している。事態は重大である」と書かれていた。  
cf. LEBLOIS; *L’Affaire Dreyfus. op.cit.*, p.494 ちなみに、スペランツァとはイタリア語で「希望」の意味であり、アンリが12月14日に偽造し陸軍省に郵送した謀略文書はスペイン語で書かれているが、差出人名はスペイン語の「エスペランサ」ではなくイタリア語で「スペランツァ」と書かれている。1897年10月にエステラジーに送られた彼に身の危険を知らせた手紙の差出人の名前は「エスペランス Espérance」である。フランス語で希望の意味がある。この手紙はアンリが書いたか、ゴンス参謀本部次長の命に従って彼がデュパティに書かせたと言われている。THOMAS, Marcel; *L’Affaire sans Dreyfus.op.cit.*,p.424-425
- (34) セーヌ県第一審裁判所での予審は*La Révision du Procès Dreyfus.Enquête de la Cour de Cassation. Instruction de la Chambre Criminelle. tome II. Paris.P-V. Stock, Éditeur.1899,pp.229-237,241-255,256-279* を参照。
- (35) DUCLERT, Vincent; *L’affaire Dreyfus*. Paris. Éditions la Découverte.2012,3e édition augmentée et mise à jour.p.47
- (36) DROUIN, Michel *L’Affaire Dreyfus.Dictionnaire de A à Z. op.cit.* pp.176,
- (37) THOMAS, Marcel; *Esterhazy ou l’envers de l’affaire Dreyfus.op.cit.*,p.345
- (38) *Ibid.*,pp.349-352 破毀院での証言はシュヴァルトコッペンと関係を持ったことは認めたが、それはサンデル情報部長の差し金であったと言いつけている。サンデルもアンリもすでにこの世にはなく、死人に口なしであった。この証言は「デイリー・クロニクルDaily Chronicle」紙に発表して、生活費の足しにしている。*Ibid.*,p.370
- (39) DROUIN ; *L’Affaire Dreyfus.Dictionnaire de A à Z. op.cit.* pp.177
- (40) この書簡の全文は*La Révision du Procès Dreyfus.Enquête de la Cour de Cassation. Instruction de la Chambre Criminelle.op.cit.*, tome premier. pp.608-611.を参照。
- (41) 証言の全文は*Ibid.*,pp.576-589を見よ。

- (42) *Le Matin. Le 7 août 1899*,p.3
- (43) BREDIN;*L’Affaire*.op.cit.,p.374 ちなみにこの長文の手紙の抜粋は1899年8月7日・8日の「ル・マタン」紙に掲載された。*Le Matin. le 7 août 1899* .p.3. et *le 8 août 1899* .p.2
- (44) *Déclarations d’Esterhazy reçues par le Consul de France à Londres(22 février -5 mars 1900)* dans LEBOIS;*L’Affaire Dreyfus. op.cit.*,pp.550-575
- (45) THOMAS, Marcel;*Esterhazy ou l’envers de l’affaire Dreyfus.op.cit.*,pp.362-363
- (46) DROUIN ;*L’Affaire Dreyfus.Dictionnaire de A à Z. op.cit.* pp.177
- (47) THOMAS, Marcel;*Esterhazy ou l’envers de l’affaire Dreyfus.op.cit.*,p.371
- (48) cf. Bibliothèque Nationale ; *Section des Manuscrits Nouvelles Acquisitions. 16458.Papier Esterhazy: Leg Desachy*この文書によってもエステラジーとサンデル情報部長との関係は判然としない。もちろんサンデル元情報部長とアンリ情報部長の名前をエステラジーが頻繁に挙げるのは、彼らが1898年までに亡くなっているからであり、参謀本部との関係は公式には当時の参謀本部総長ボワデッフルや次長ゴンスによって否定されている。